フィリピン・セブ島における
バジャウの魚名に関するフィールドレポート

辻　　貴　志

1　はじめに

本レポートは、フィリピン・セブ島のバジャウ（Badjao）の魚名に関する予備的研究であり、現地でのフィールドワークの成果について報告する。

なぜ、魚名の研究なのかという問いについては、魚名に焦点を当てることで、魚の分類体系だけでなく、漁法、食文化、社会文化、人々の観念、社会変化について知ることができるからである（辻 2005）。さらに、棲息場所、形態、色彩、紋様、怪異・強大または可憐・細美、習性及び動作、発音その他、魚体の部分観察、季節、成長度合、性別についても魚名から知ることができる（澁澤　1959）。一方で、時代の推移と地域が変わることによって、転化・転呼して語源とは著しく変化してしまっている魚名も多いことに注意が必要である（榮川　1974）。

フィリピンにおける魚名の先行研究として、ヘレによるフィリピン群島の水産資源調査報告があり、これはフィリピンの漁撈活動で漁獲される魚種の名前、有用性、生態、調理法、漁法、漁場、取引形態、釣り遊び、有毒性について綿密に調査している（ヘレ 1929）。言語学的側面からの魚名研究として、フィリピン北部のイトバヤット島の魚名をディクテーションによって収集した山田幸宏の研究があり、これはイトバヤット語の魚名をデータベースや図鑑を基にリスト化している（Yamada　1995）。また、山田はインドネシアのバリ島の魚名（Yamada 1998）、マレーシアのコタバルの魚名（Yamada and Faisal 1999）についても魚の情報と併せて記録している。魚名の民俗分類学的研究については、秋道智彌によるミクロネシアのサタワル島での研究（秋道　1984）や、土田滋による台湾のヤミ族の研究（土田　1996）があり、これらの研究は魚名の分析により人々の生活や文化、そして世界観について検討している。さらに、後藤明は、ポリネシア語の魚名の意味論的考察を行い、地域の環境条件、漁法、社会的条件によって魚の重要性が変わることで魚名に変化が生じることを示した（後藤 1999）。

バジャウの魚名の先行研究については、小野林太郎が東マレーシアのボルネオ島センポルナのバジャウの魚名 200 点以上を挙げ、若干の分析を加えている（小野　2011）。また、Kauman Sama Online（https://sinama.org/2016/07/common-reef-fish-sinama-english-scientific-name-poster/：2023 年 11 月 22 日閲覧）も若干のバジャウ語の魚名を紹介しているが、体系立った研究はない。そこで、本研究ではできる限り多くのバジャウの魚名を収集し、分析を試みることを目指した。

今日、バジャウの生活は、従来の海洋での漂海生活から陸上での生活へと変わり、経済、社会、政治の「近代化」を通して大きく変容の過程にある（長津 1994）。こうした中で、魚名に着目することは、バジャウの魚名の知識だけでなく、彼らの生活の状態や問題についても理解することにつながると考える。

本レポートは、現地でのフィールドワーク中にまとめたものである。バジャウの魚名を収集し、検討を加

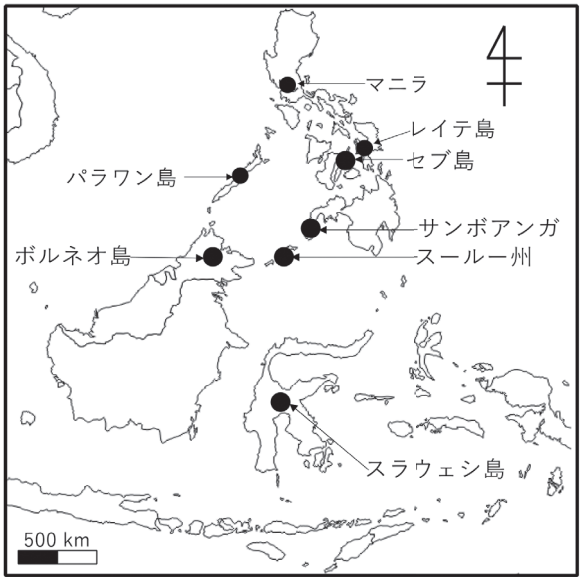

図 1．セブ島及び本レポートに関連する地域の位置（筆者作成）

えることで、今後のバジャウ研究のための資料とすることを目的とした。

2　調査地と調査の概要

本レポートに関する調査は、フィリピン諸島中部のビサヤ地域に位置するセブ島中南部のM行政区のN集落で行った。M行政区の人口は32,564人（2015年）であり（Philippine Statistics Authority Region 7 Cebu Provincial Statistical Office 2019）、セブアノ語を話すセブアノの人口がマジョリティーを占める。セブアノはセブ島を代表する民族集団であり、ミンダナオ島にも多く分布し、フィリピン最大の民族集団のタガログに次いで人口が多い。一方、バジャウはフィリピン各地において他集団から蔑まれる少数民族であり、その構図は調査地においても同様である。N集落にはバジャウが多く集住する。バジャウの世帯は約300世帯、人口は約1,000人である。なお、同じくビサヤ地域のレイテ島にも同様に大きなバジャウのコミュニティーがある。バジャウは東南アジアの漂海民であり、フィリピンだけでなく、マレーシアのボルネオ島やインドネシアのスラウェシ島にも分布する（図1）。

M行政区では宅地や土地や道路の開発が進み、近くには大型の商業施設がある。開発は、2000年頃から国家政策の「南部開拓計画（South Reclamation Project: SRP）」の一環で始まった。加えて、2020年頃から国家とセブ市の都市貧困層福祉事業部（Division for the Welfare of the Urban Poor）による共同開発も始まった。[1]

調査地でのバジャウの基本的な漁法は、水中銃（*panaʔ*）を用いた素潜りによる海での潜水漁である。[2] 漁にはエンジン付きの舟（*bangka*）を使う（写真1）。舟のエンジンは1980年代に導入され、それまでは帆（*banog*）を動力としていた。16時頃から翌朝4時頃まで懐中電灯を用いた電灯潜りを行う。現在、銛は使用しない。深い水深で大型のナマコを主に採集するコンプレッサー漁にも従事し、セブアノ漁民の船に乗り込む。夏季（3月頃から4月頃）には、12時頃から15時頃にかけて高値で取引されるヨコシマサワラ（*tangi*）を狙った漁に出る。漁場はセブ島に近いボホール州のヒロトゥガン島周辺と他の近郊の島々周辺を選択している。セブ州マクタン島に近いヒロトゥガン島周辺は好漁場であり、潜水漁を始め多様な漁撈が展開されている（Tsuji 2013、2019、2020）。ただし、貝類（*tabbahan*）を始めとする沿岸資源の採捕は、採り過ぎや沿岸の開発により資源量が減ったことからほとんど行わない。

漁撈は男性の仕事である。関連して、調査地では舟造りをしている男性たちの姿が目立つ。女性は家事の他、露店でごく小規模に野菜や菓子や飲料を販売する。今日、観光地や繁華街で真珠を売り歩いたり（写真2）、物乞いをしたりするバジャウの人々が少なく

写真1．バジャウの舟（2023年3月9日、セブ島、筆者撮影）

写真2．バジャウの真珠売り（2023年3月8日、セブ島、筆者撮影）

1　沿岸の埋め立てを始め、バジャウを含む地域の漁民世帯は立ち退きを強いられる開発の脅威に曝されている。バジャウの中には、親類を頼って故地のサンボアンガに戻ったり、パラワン島に移住したりした人々もいた。開発により、漁場へのアクセスが悪くなり、舟のガソリン代がかさむようになったという人もいる。N集落のバジャウのコミュニティー内部では開発に対する賛否が分かれている。

2　小野は、バジャウの漁法として、①網漁、②釣漁、③突き漁、④籠漁、⑤魚毒漁、⑥シャコ罠漁、⑦ダイナマイト漁、⑧潮間帯での採集、⑨海藻養殖業、⑩蓄養業を挙げている（小野　2012）。

写真 3. 道端で商品を売るバジャウの女性（2023 年 3 月 8 日、セブ島、筆者撮影）

写真 4. バジャウの杭上家屋（2023 年 3 月 8 日、セブ島、筆者撮影）

ない。[3] 子供たちの中には市場で安く仕入れたタオルを売り歩く他、学校に行かず物乞いする子たちもいる。このように、教育を受ける権利を妨げるが、子供の家計における労働力は無視できない。人々は農耕には従事せず、農耕に適した土地も周辺にまったくない。[4] 農産物を得るには、海産物との交易が必須である。

調査集落の人々の主食は、キャッサバあるいはコメと魚が基本である。キャッサバとコメは市場で購入する。キャッサバは、澱粉を油で揚げて食する。若い世代はキャッサバよりコメを好む。近所の露店で簡単な出来合いの食品を購入する人々も目立つ。魚は漁撈で得るか、市場で購入する。食事は 1 日 2 回摂取し、間食におやつを食する。食事の時間帯は、10 時頃と 18 時頃である。

道端では、女性たちが小規模に野菜や食品を売っている（写真 3）。これらの商品は、セブ島の主要な市場でありアクセスしやすい距離にある、主に野菜を扱うカルボン市場や、魚介類を扱うパシル市場で仕入れ、集落で売り利鞘を稼ぐ。

集落は海に面しており、杭上家屋が建っている（写真 4）。家屋下の水辺にはプラスチックを始めごみが堆積しており、悪臭が漂う不衛生な環境である。生活用水は井戸水と天水に頼るが、集落の側には水道もある。集落には電気も通っている。調理にはボンベ式のガスを利用する。その他、バジャウのモスクがあり、導師を中心に礼拝を行っている。バプテスト教会もあるが、ここにはバジャウと婚姻関係にあるセブアノの人々が集う。キリスト教系組織が建てたバジャウのための保育園には、全ての児童が通っていない。

本レポートに関する調査は、2023 年 3 月 7 日から 23 日にかけて行った。主に集落の長（Barangay Captain）であるサンボアンガ出身のバジャウの男性 Sd 氏（50 歳）と、その妹でバジャウ・コミュニティーの保育園の教諭を務める女性 Sm 氏（47 歳）にインフォーマントになってもらい、バジャウ語の魚名について聞き取りを実施した。Sd 氏は集落で唯一の役員であり、その他の役員はセブアノが占める。彼はほとんど家におり、子供や孫の収入をあてに暮らしている。時折海に出て水中銃で魚を突くこともあるが、観察の結果、海との関わりは希薄であると推察できた。一方、Sm 氏は N 集落のバジャウ・コミュニティーのリーダーであり、地元のサン・カルロス大学から庇護を受けながら生活している。彼女が漁撈に従事することはまったくない。Sm 氏の夫はパラワン島の州都のプエルト・プリンセサのバジャウ・コミュニティーに住んでいる。彼らの父親は、魚名を始め海に関する知識が豊富であり積極的に漁撈に従事していたが、すでに物故した。他に、魚名についてより深い知識を有している古老が調査地にいないことから、これ以上の聞き取りは行えなかった。聞き取りには魚類図鑑（Allen 2000）を用い、Sd と Sm 両氏が知っている魚名について教えてもらった。筆者はタガログ語で聞き取りを行い、バジャウ語の魚名を収集した。そし

3　物乞いをバジャウのアイデンティティの戦略的利用と捉える研究もある（Alojamiento 2001; 青山　2001）。

4　しかし、彼らの故地のフィリピン南部のスールー地域のタウィタウィ島では、バジャウ（陸サマ）がキャッサバを主に栽培しているとの報告がある（Pepito 1995）。また、焼畑農耕にも従事し、コプラ、バナナ、コメ、キャッサバを栽培する（Han 1996）。

て、Sm 氏に魚名の綴りに誤りがないかチェックしてもらった。また、集落の人々の生活に関する観察調査を併せて行った。

本調査は、セブ島のサン・カルロス大学の監督下において実施した。

3　結果と考察

3-1　命名の特徴

バジャウ語の「魚」の包括名は *daing* である。聞き取りの結果、68 点の魚名（70 種）を収集した（表 1）。これらの魚名は他のフィリピン方言と同様あるいは類似するものがあることから、ここでは特徴的な命名のみ検討するに留めておく。

サメとエイは、それぞれ *kalitan* 及び *pahi* と呼ぶ。フィリピンでは、サメを一般的に *patin* と総称する。フィリピン西南部のパラワン島の先住民はサメを *käritan* と呼び（辻　2012、2022、Tsuji 2022）、*kalitan* はフィリピン南部の魚名であることが推測できる。エイ（写真 5）については、フィリピンでは *pagi* あるいは *pari* と総称し、*pahi* と共通の語源であることがわかる。なお、*pari* はオーストロネシア語圏の基層語である。

ハタ科は細かく命名されており、*kuhapu*（タガログ語では *lapu-lapu*）という総称に加え、*kuhapu* の範疇に含まれるアザハタ、*kubing*（サラサハタ）、*kaloy*（スジアラ）、*bagahak*（ヒトミハタ）も確認できた。ハタ科の魚は高値で取引の対象となることから、より詳細に分類されている可能性がある。アジ科やサバ科も細かく分類されているが、これらは身近な魚であり、商品価値が高い。

写真 5. 天日で干したヤッコエイ（2023 年 3 月 13 日、セブ島、筆者撮影）

科を超えて同じ名前で呼ばれる魚も確認できた。ツバメウオ科のヒメツバメウオとチョウチョウウオ科のツノダシを *bebang* と呼ぶが、これらは形態が似ている。

カツオは大型のものを *poyan* と呼び、中型のものを *mangko*、小型のものを *baleng-baleng* と呼ぶ。この分類が正しいとするなら、成長段階により魚を命名していることになる。[5] 同様にタツノオトシゴの一種であるイバラタツを *undok* と呼び、小さな個体は *undok-undok* と呼ぶ。ただし、成長段階の違いではなく、両者が別種である可能性も否定できない。

テングハギモドキ（*kumay*）と額部に突起を持つテングハギ（*kumay kangan*）は、接尾語の *kangan* によって区別する。同様に、フグ科は *buntal* と総称され、接尾語に *daing* が付くとサザナミフグ、*itingan* がつくと体表に棘のあるヒトヅラハリセンボンを指す。このように接尾語で区別される魚名は他にもある。例えば、マダラトビエイ（*pahi manok*）は「ニワトリに似たエイ」、イトヒキアジ（*daing pote*）は「白い魚」を意味する。その他については、詳細に聞き取れていない。

3-2　音韻の特徴

バジャウはフィリピン諸島の中でも、南部のスールー地域に多く分布する。この地域の人々の言語の母音体系は (/a, e, o, i, u, ə/) あるいは (/a, e, o, i, u/) であるが（Kaufman 2022）、狭中舌円唇母音（/ʉ/）と声門閉鎖音（/ʔ/）を含む可能性がある。例えば、*bullong*（ブチアイゴ）の u、*bengke*（トビウオの一種）の最初の e、*tabelong*（コンゴウフグ）の e の音は狭中舌円唇母音（/ʉ/）のように発音する。[6] また、*bunaʔ*（ツバメウオの一種）、*rumpiʔ*（オニカマス）、*lampeʔ*（ミツバモチノウオ）、*kaʔ*（メガネモチノウオ）の語末には声門閉鎖音（/ʔ/）も生じる。[7]

5　フィリピンでも魚の成長段階に応じて魚名が異なることを、筆者はパラワン島の先住民に対する調査においていくつか記録した。例えば、チョウチョウコショウダイ（*Plectorhinchus chaetodontoides*）の成魚を *longaʔ-longaʔan*、幼魚を *bokukkuʔ* と呼ぶ（辻　2005）。

6　/ʉ/ は、日本語の唇を丸めて「ブ」と発音する音ではなく、唇を横に広げ、舌をやや喉の奥に引っ込めたような音である。

7　/ʔ/ は、「ゴホッ」と咳き込んだ際の、「ッ」に相当する音である。

3-3　食禁忌

毒のあるフグを除き（特に小型のフグは食用にしない）、どの魚も食用にするという回答を得た。パラワン島南部のように特定のサメやエイ、そしてオニカマスを祖先とみなし食禁忌の対象とする観念（辻 2012、2022、Tsuji 2022）は確認できなかった。

3-4　民話

魚に関するバジャウの民話は複数あるようであるが、ここでは聞き取ることができたブダイの一種（*tombad*）の民話（*Si Tombad*）を一つ挙げておく。[8]

> *Tombad* はお姫様に恋をした。そこで、お姫様と結婚したいと王様に願い出たが、その願いは聞き入れられなかった。彼は自分が上手に泳ぐことができ、責任感が強いことを必死に訴えた。しかし、お姫様は *Tombad* を嫌いだと言った。なぜなら、彼が人間ではなく魚であったからだ。（採集日：2023 年 3 月 13 日、話者：Sm 氏、採集者：辻貴志）

3-5　言葉遊び

ササウシノシタの一種（*kulampera*）は、タガログ語の *kulang pera*（「お金が足りない」）になぞらえられる。ギマの一種（*patay*）はタガログ語の *patay*（「死」）になぞらえられるが、この魚は人間を死に至らしめる毒を持たない。

4　おわりに

以上、セブ島のバジャウの人々に対して、バジャウ語の魚名について聞き取りを行った結果を示した。主な聞き取り対象者が 2 名であったことから、68 点のみの魚名の収集に留まった。小野（2011）がボルネオ島センポルナで収集したバジャウ語の魚名約 200 点に比べ、大幅に少ない結果となった。センポルナのバジャウは人口が多く、より深く海に依存した生活を営んでいる。このように魚名に関する知識には個人差、時代差、地域差もあることから、より多くの人々に対して魚名の収集を行うことが今後の課題である。

バジャウは元来、あらゆる海洋資源を利用して生計を立ててきた。しかし、今日、彼らが拠り所としてきた家船で海洋を移動しながらの生活は、社会環境の変容により成り立たなくなった。彼らの中には陸上での生活に対応しきれず、首都マニラを始め都市部に出て物乞いする人々も少なくない。

セブ島のバジャウの主な生計は、依然として海洋資源に依存しなくてはならないのが現状である。しかし、目ぼしい漁場が海洋保護区に指定され、限られた範囲でしか漁撈を行えない問題が生じている。また、日中、水深が浅い日が続くと、出漁を控える。海を利用するバジャウの生活は、ますます困難になりつつある。

調査集落のバジャウの人々の中には、過去に家船で生活した経験を持つ人々もいる。現在からおよそ 50 年前のことであるが、おそらくその頃には彼らの魚名に関する知識はより豊かであったと考えられる。そのことは、「自分の父や祖父は魚名についてよくわかっていたが、自分たちの世代では海との関わりが薄くなったことからほとんどわからない」というインフォーマントたちの語りからも支持できる。海との積極的かつ濃厚な関わりこそが、魚名を豊かに維持する営為であることは確かに違いない。

収集できた魚名の少なさについては、問題点も指摘できる。まず、本地域での調査が筆者にとって初めての経験であり、人々との十分な信頼関係を構築できなかった点が挙げられる。筆者がバジャウ語を理解できないコミュニケーション上の壁も大きく立ちはだかった。そして、魚名の聞き取りに原色図鑑ではなくイラスト図鑑を用いたことから、正確な魚種の同定ができなかった。また、調査期間中に筆者が食中毒に陥った健康問題もマイナスに影響した。本レポートの結果には、このような調査上の限界が含まれている。

収集できた 68 点の魚名からバジャウの世界観を理解するには程遠いが、彼らの海との関わりを知るきっかけとして、魚名の研究は一つの有益な手段である。彼らの魚名に関する知識に意味を持たせるには、さらなる魚名の収集と分析が必要である。また、セブ島のバジャウの魚名は、セブアノの人々の影響を受けていると考えられる。例えば、*tamban*（ヤマトミズン）や *galunggon*（クサヤモロ）は全国的に通用する魚名

8　バジャウの海洋民話には「サルとナマコ」の話があるが（Kauman Sama Online 2021; Tsuji 2023）、インフォーマントたちはこの民話について知らない様子であった。

である。よって、セブアノを始め他の民族の魚名についても調べることで、バジャウの魚名の特徴が浮かび上がると期待できる。本調査ではセブアノの魚名についても調べたが、その成果については稿を改めて報告したい。

本研究でわかったバジャウの魚名からは、それらが①フィリピン南部の要素を強く帯びていること、②商品価値の高いハタ科・アジ科・サバ科の魚を細かに分類していること、③魚の成長段階や接尾語から今後より深い魚名の洞察が可能になり得ること、④魚に関する民俗を始めさらなる民族魚類学的な研究に発展し得ること、⑤記録を急がなくては彼ら独自の魚名がおぼろげになり得る社会環境にあることが現段階では指摘できる。いずれについても、引き続きデータを収集し、早急に解明していくべき課題である。

以上、本レポートはバジャウの魚名の収集と魚名の状況について調査することを試みた。その結果、セブ島に生きるバジャウの魚名に関する一資料を記録できた。また、彼らの生活を垣間見て、その現況について報告した。特に、セブ島の南部開拓計画による開発の影響が魚名の知識に否定的に及び得る、あるいはすでに及んでいる可能性がある。また、セブアノが大半を占める社会環境でマイノリティーとして生活するうちに、魚名を含む彼ら独自の文化が希薄化していることも十分に想定できた。後藤（1999）が指摘したように、地域の環境条件、漁法、社会的条件によって魚名に変化が生じていることが窺える結果を得た。

本研究は、予備的調査の段階である。今後、本データを活用し、さらなる魚名の収集と構造分析を行う予定である。そして、バジャウ研究の発展に寄与することを期待したい。

謝辞

本調査は、人間文化研究機構のグローバル地域研究推進事業（国立民族学博物館「海域アジア・オセアニア研究拠点」）の資金により可能となった。本調査の機会を与えて下さった国立民族学博物館学術資源研究開発センターの小野林太郎教授に謝意を示したい。

調査地では、バジャウの人々のお世話になったが、特にバジャウ・コミュニティーのリーダーである Sm 氏には魚名のスペルチェックを始め親切に調査に協力頂いた。

本調査を進めるにあたり、サン・カルロス大学の Zona Amper 教授は温かく便宜を図って下さった。

以上、記して謝辞としたい。

引用文献

（日本語文献）

秋道智彌　（1984）『魚と文化－サタワル島民族魚類誌』東京、海鳴社。

青山和佳　（2001）「ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程－経済的福祉とエスニック・アイデンティティの観点から」『東南アジア研究』38（4）：552-587。

榮川省造　（1949）『魚名考』神戸、甲南出版社。

後藤明　（1999）「ポリネシア語の魚名とその文化史的位置づけ－東部ポリネシア語名称を中心に」中尾佐助・秋道智彌編『オーストロネシアの民族生物学－東南アジアから海の世界へ』東京、平凡社、pp.267-294。

ヘレ，アルバート・W　（1929）『比律賓群島の水産資源』（臺灣總督官房調査課編譯）、臺灣總督官房調査課。

長津一史　（1994）「スルー諸島における近代化と社会変容－漂海民バジャウの定住化をめぐって」『TROPICS』3 (2): 169-188。

小野林太郎　（2011）『海域世界の地域研究－海民と漁撈の民族考古学』京都、京都大学学術出版会。

小野林太郎　（2012）「動作の連鎖・社会的プロセスとしての漁撈技術－ボルネオ島サマによる漁撈活動を中心に」『文化人類学』77(1): 84-104。

澁澤敬三　（1959）『日本魚名の研究』東京、角川書店。

土田滋　（1996）「ヤミ語」大森千明編『AERA Mook14　外国語学がわかる。』東京、pp.66-69。

辻貴志　（2005）「フィリピン・パラワン島南部におけるモルボッグの民族魚類学的研究－市場経済下の民俗知識とその変容」『人間文化』20: 69-90。

辻貴志　（2012）「『守護神』としてのサメとワニ－フィリピン・パラワン島の事例」『万葉古代学研究所年報』10：113-125。

辻貴志　（2022）「フィリピン・パラワン島南部におけるサメにかんする民俗」『民俗文化』34: 37-46。

（外国語文献）

Allen, G. (2000) *A Field Guide for Anglers and Divers: Marine Fishes of the South-East Asia*. Singapore: Periplus.

Alojamiento, S. (2001) The Sama Dilaut: From the Seas to the Highways. *TAMBARA* 18: 61-72.

Han, B. A. (1996) *A Perspective of the Life and Death Cycle among the Sama of Tawi-Tawi*. Metro Manila: Education Research Program, Center for Integrative and Development Studies, University of the Philippines, and Department of Education, Culture and Sports, Bureau of Non-Formal Education.

Kaufman, D. (2022) The Sama-Bajaw Languages. In Schapper, A. and Adelaar, S. (eds.) *Oxford Handbook of Western Austronesian Languages*. Oxford: Oxford University Press, pp. 1-22.

Kauman Sama Online. (2021) *The Monkeys and the Sea Cucumbers: Traditional Story from the Sulu Archipelago*. Maasim, Sarangani: Kauman Sama Online.

Pepito, R. (1995) Mga Badjao sa Bongao. *IPEG*1: 79-92.

Philippine Statistics Authority Region 7 Cebu Provincial Statistical Office (2019) *Countryside in Figures 2019*: *Cebu City*. Cebu City: Philippine Statistics Authority Region 7 Cebu Provincial Statistical Office.

Tsuji, T. (2013) The Technique and Ecology Surrounding Moray Fishing: A Case Study of Moray Trap Fishing on Mactan Island, Philippines, Ono, R., Addison, D., and Morrison, A. (eds.). *Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Region*. Canberra: Australian National University Press, pp. 167-181.

Tsuji, T. (2019) An Ethnography on the Wedge Sea Hare in Mactan Island, the Philippines. *Naditira Widya* 13 (2): 135-150.

Tsuji, T. (2020) Common Spider Conch (*Lambis lambis*) Collecting in Mactan Island, Cebu, the Philippines. *The Philippine Quarterly of Culture and Society* 48 (1-2): 61-84.

Tsuji, T. (2022) A Study on Shark Totems among Ethnic Groups in the Southern Palawan Island of the Philippines. *Ignis* 2: 59-74.

Tsuji, T. (2023) Exploring the Philippine Society and Culture in Monkey Folktales. *The Southeastern Philippines Journal of Research and Development* 28 (1): 31-47.

Yamada, Y. (1995) *Fish Names in Itbayat, Philippines (Ngarangaran no Among do Dichbayat)*. Himeji, Japan.

Yamada, Y. (1998) *Fish Names in Gumicik, Bali, Indonesia*. Himeji, Japan.

Yamada, Y. and Faisal, N. A. M. (1999) *Fish Names in Kota Bharu (Kelantan, Malaysia)*. Himeji, Japan.

表 1．収集したバジャウ語の魚名（聞き取りにより筆者作成。注記のページ番号は Allen 2000 と対応）

番号	科名	和名	学名	バジャウ語	注記
1	-	サメ	-	*kalitan*	サメ一般を *kalitan* と呼ぶ。
2	サカタザメ科	サカタザメ	*Aptychotremata* sp.	*pendong*	p.47-2
3	アカエイ科	ヤッコエイ	*Dasyatis kuhlii*	*kihampau*	p.47-11
4	トビエイ科	マンタ	*Manta birostris*	*sanga*	p.49-7
5	トビエイ科	マダラトビエイ	*Aetobatus narinari*	*pahi manok*	p.49-11。エイ一般を *pahi* と呼ぶ。
6	オキイワシ科	オキイワシ	*Chirocentrus dorab*	*dain lantay*	p.50-5
7	ニシン科	ヤマトミズン	*Amblygaster leiogaster*	*tamban*	p.51-6。フィリピンで全国的に *tamban* と呼ぶ。
8	ウツボ科	ウツボの一種	*Gymnothorax zonipectus*	*tago*	p.52-12。ウツボ科一般を *tago* と呼ぶ。

番号	科名	和名	学名	バジャウ語	注記
9	ゴンズイ科	ゴンズイ	*Plotosus lineatus*	*baki*	p.61-5
10	トビウオ科	トビウオの一種	*Cypselurus* sp.	*bengke*	p.65-1。*Bengke* の最初の e の音は狭中舌円唇母音 /ʉ/。
11	ダツ科	ハマダツ	*Ablennes hians*	*selo*	p.65-9。ダツ科一般を *selo* と呼ぶ。
12	イットウダイ科	マツカサウオの一種	*Myrpristis hexagonatus*	*ketong*	p.67-2
13	イットウダイ科	トガリエビス	*Sargocentron spiniferum*	*tihik-tihik*	p.67-13
14	ヤガラ科	アカヤガラ	*Fistularia petimba*	*ungok*	p.71-9
15	ヨウジウオ科	イバラタツ	*Hippocampus hystrix*	*undok*	p.73-6。小さな個体を *undok-undok* と呼ぶ。
16	フサカサゴ科	ボロカサゴ	*Rhinopias aphanes*	*tingil*	p.75-13
17	フサカサゴ科	オニダルマオコゼ	*Synanceja verrucosa*	*kappo*	p.75-19
18	フサカサゴ科	ハナミノカサゴ	*Pterois volitans*	*tingil*	p.77-6
19	ハタ科	アザハタ	*Cephalopholis sonnerati*	*kuhapu*	p.83-8。ハタ科一般を *kuhapu* と呼ぶ。
20	ハタ科	サラサハタ	*Cromileptes altivelis*	*kubing*	p.83-10
21	ハタ科	スジアラ	*Plectropomus leopardus*	*kaloy*	p.87-7
22	ハタ科	ヒトミハタ	*Epinephelus tauvina*	*bagahak*	p.91-11
23	キントキダイ科	キントキダイ	*Priacanthus macracanthus*	*kandaman*	p.101-3
24	テンジクダイ科	オグロテンジクダイ	*Apogon fuscus*	*ibis*	p.102-11
25	テンジクダイ科	テンジクダイの一種	*Apogon brevicaudatus*	*bungka*	p.105-7
26	アジ科	イトヒキアジ	*Alectis ciliaris*	*daing pote*	p.113-1。アジ科一般を *daing pote* と呼ぶ。
27	アジ科	ホシカイワリ	*Carangoides fulvoguttatus*	*mangali*	p.113-9
28	アジ科	ロウニンアジ	*Caranx ignobilis*	*mangsa*	p.115-1
29	アジ科	クサヤモロ	*Decapterus macarellus*	*galunggong*	p.115-13。フィリピンで全国的に *galunggong* と呼ぶ。
30	シイラ科	シイラ	*Coryphaena hippurus*	*lali*	p.117-1
31	ギンカガミ科	ギンカガミ	*Mene maculata*	*bilong-bilong*	p.119-9
32	ヒイラギ科	セイタカヒイラギ	*Leiognathus equulus*	*sap-sap*	p.119-12
33	フエダイ科	ハチジョウアカムツ	*Etelis carbunculus*	*tagisiyang*	p.121-3
34	フエダイ科	ナミフエダイ	*Lutjanus rivulatus*	*tay-asang*	p.123-9
35	イサキ科	アジアコショウダイ	*Plectorhinchus picus*	*lappe*	p.127-12
36	タカサゴ科	ハナタカサゴ	*Caesio lunaris*	*sulig*	p.129-11
37	フエフキダイ科	アマミフエフキ	*Lethrinus miniatus*	*kutambak*	p.133-6

番号	科名	和名	学名	バジャウ語	注記
38	イトヨリダイ科	イトヨリダイの一種	*Nemipterus isacanthus*	*kulisi*	p.137-6
39	ヒメジ科	オオスジヒメジ	*Parupeneus barberinus*	*timbugan*	p.141-16。ヒメジ科一般を *timbungan* と呼ぶ。
40	ヒメジ科	ウミヒゴイ	*Parupeneus chrysopleuron*	*timbugan*	p.143-4
41	ツバメウオ科	ヒメツバメウオ	*Monodactylus argenteus*	*bebang*	p.145-6。ツバメウオ科一般を *bebang* と呼ぶ。
42	ツバメウオ科	ツバメウオの一種	*Platax batavianus*	*bunaʔ*	p.147-4
43	キンチャクダイ科	ロクセンヤッコ	*Pomacanthus sextriatus*	*taliruk*	p.157-7
44	スズメダイ科	オヤビッチャ	*Abudefduf vaigiensis*	*lasu-lasu*	p.161-3
45	スズメダイ科	スミレスズメダイ	*Neopomacentrus violascens*	*tibuk*	p.163-18。スズメダイ科一般を *tibuk* と呼ぶ。
46	ボラ科	アンピンボラ	*Liza subviridis*	*banak*	p.177-2
47	カマス科	オニカマス	*Sphyraena barracuda*	*rumpiʔ*	p.177-12
48	ベラ科	ミツバモチノウオ	*Cheilinus trilobatus*	*lampeʔ*	p.179-12
49	ベラ科	メガネモチノウオ	*Cheilinus undulatus*	*kaʔ*	p.181-11
50	ベラ科	アミトリキュウセン	*Halichoeres purpurescens*	*pul-lay*	p.191-7
51	ブダイ科	イロブダイ	*Cetoscarus bicolor*	*ogos*	p.199-2。ブダイ科一般を *ogos* と呼ぶ。
52	ブダイ科	ブダイの一種	*Scarus prasiognathus*	*tombad*	p.199-4。民話あり。
53	イソギンポ科	イソギンポの一種	*Salarias spaldingi*	*tongolowang*	p.209-17
54	チョウチョウウオ科	ツノダシ	*Zanclus cornutus*	*bebang*	p.222-9。
55	アイゴ科	ブチアイゴ	*Siganus puncutatus*	*bul-long*	p.222-10。*Bul-long* の u の音は狭中舌円唇母音 /ʉ/。
56	ニザダイ科	テングハギモドキ	*Naso hexacanthus*	*kumay*	p.225-5
57	ニザダイ科	テングハギ	*Naso unicornsis*	*kumay kangan*	p.226-13
58	マカジキ科	シロカジキ	*Makaira indica*	*kandelan*	p.230-1
59	サバ科	キハダマグロ	*Thunnus albacares*	*panit*	p.230-8。*Yellowfin* とも呼ぶ。
60	サバ科	カツオ	*Katsuwonis pelamis*	*poyan*	p.230-12。中型の個体を *mangko*、小型の個体を *baleng-baleng* と呼ぶ。
61	サバ科	ヨコシマサワラ	*Scomberomorus commerson*	*tangi*	p.232-2。カマスサワラ（*Acanthocybium solandri*）の可能性がある。
62	サバ科	スマ	*Euthynnus affinis*	*sobad*	p.232-7
63	タチウオ科	タチウオ	*Trichiurus lepturus*	*langing*	-
64	ササウシノシタ科	ササウシノシタの一種	*Dexillichthys muelleri*	*kulampera*	p.235-11
65	ギマ科	ギマの一種	*Triacanthus nieuhofi*	*patay*	p.237-9

番号	科名	和名	学名	バジャウ語	注記
66	モンガラカワハギ科	ゴマモンガラ	*Balistoides viridescens*	*pagod*	p.239-3
67	ハコフグ科	コンゴウフグ	*Lactoria cornuta*	*tabelong*	p.245-1。*Tabelong* の e の音は狭中舌円唇母音 /ʉ/。
68	フグ科	サザナミフグ	*Arothron hispidus*	*buntal daing*	p.245-13
69	ハリセンボン科	ネズミフグ	*Diodon hystrix*	*buntal*	p.246-14
70	ハリセンボン科	ヒトヅラハリセンボン	*Diodon liturosus*	*buntal itingan*	p.248-14